

声優を

プロデュース。

納谷僚介

大塚明夫

この本は「それでも
あきらめない者達」に
とって禁断の航海図となるだろう。

悩んだり迷ったりするたび、
牛井の話に何度も
助けられています。

加隈亜衣

「ゴリ押し」の何が
悪いんですか？

業界きってのマネージャーが語る、禁断の声優プロデュース論！

声優をプロデュース。

納谷僚介

星海社

128



まえがき

僕には夢があります。

たぶん、一生叶わない夢。

それは「後悔をなくす」ことです。

僕が仕事をしている声優業界には、
たくさんの声優志望者が入っ
てきます。

そして業界を去っていきます。



この数を減らすことはできません。

なぜなら、声優業界は椅子取りゲーム、生き残れる人の数は決まっているからです。

声優志望者には、ふたつのタイプがあります。

何だと思いますか？

「成功する人」と「失敗する人」？

たしかに、それはそれで正解です。

でも、成功ってなんでしょう？

多くの作品に出て、数々の素敵な役を演じている人は成功しているのでしょうか。逆に、一本の作品にも出ておらず、誰にも知られていない人は失敗したのでしょうか。

断言しますが、数多くの作品や役に恵まれても、満たされていない人もいます。そして、たとえ誰にも知られていなくとも、満足している人もいます。

だから僕はこう考えているんです。声優志望者、ひいては声優業界には「後悔する人」と「後悔しない人」がいる。

僕は、この「後悔する人」をなくしたい。

無理なのは百も承知ですが、実現させたいのです。

ある（元）声優の話

では、後悔するかしないかの差は、どこから生じるのでしょうか。

ある声優がいました。

僕がマネージャーとして彼と出会ったのは、彼が声優業界に入って七年目を迎えるころ。出会った直後に、彼は僕に「声優として売りたいです」と言ったんです。

僕はそれに対して「一緒にがんばろう」と応えました。

約三年間、必死の毎日を送りました。

ボイスサンプルを持っていろんな人に挨拶をしまわり、大量のオーディションを受けさせ、熱心なファンを増やそうとイベントを開催し、ラジオ番組を作り……一緒に泣いて、笑って、時にはケンカもしました。それくらい、お互いに本気でした。

でも、残念ながら彼は、彼や僕が願っていたほどには売れませんでした。

そして出会ってから三年、彼が声優の道を志してから一〇年の歳月が経った年のある日、彼が僕のところに来て言ったんです。

「声優、辞めることにしました」

……返す言葉がありませんでした。

「わかった。ごめんね」と、短く発するのが精一杯でした。
それに対する彼の返事が、今も忘れられません。

「やれることはぜんぶやりましたから。ありがとうございました」

……こみ上げてきたのは、何とも表現しがたい気持ちでした。

僕にもっと力があれば、彼は売れたかもしれない。

もつと他のやり方をしたら、結果は違ったかもしれない。

悔しい。とても悔しい。

でも一方で、やれることはやったという満足感もあったんです。
不思議な感覚でした。

ただ悲しいだけの気持ちで終わらなかったのは、きっと……彼が後悔していなかったからです。

それからです。

僕の目標が「後悔する人」をなくす……声優に後悔をさせないというものになったのは。

手がけた声優が成功すればもちろん最高です。

ですが、そうなれなかったとしても、世間的には失敗したと見えたとしても、その声優が「やりきれた」と言えるだけのことをやらせてあげたい。

そういつてもらえるように、声優に仕事の舞台を用意し続ける。それが僕のやりたいことです。

マネージャーの生き方

声優にやりきらせるために、大事なもの。

大切なパートナー。それがマネージャーです。

マネージャーも実は入れ替わりの激しい世界です。

一〇年以上やっている僕は、もうベテランの部類に入っています。うちの事務所（マウスフロモーション）だけではなく、多くの声優事務所で、マネージャーは一〜三年くらいのキャリアの方が多くいます。

若い感性で頑張っている方もたくさんいて、そんな人たちに先輩風を吹かせる気はないです。

でも、どうしていいかわからない、自分のしていることが正解かどうか不安で仕方ない。

もしくは、そんなことを考えたこともなく、漫然と日々の業務に流されてしまっている……そんな人もたくさんいると思います。か

つては僕もそうでした。

この本がそんな人たちのヒントにちよつとだけなつて、後悔する声優を一人でも減らせればいいと考えています。

よく「なんでマネージャーをやっているんですか？」と質問されます。

たしかにマネージャーというのは、何が面白いのか、何がやりがいなのか、がわかりにくい仕事でしょう。

声優のマネージャーのあいだで格言的に使われている言葉で、「仕

事があるのは役者のおかげ、仕事がないのはマネージャーのせい」というものがあります。

ある仕事が成功しても、賞賛を浴びるのは声優で、マネージャーの仕事が評価されることは滅多にありません。逆に失敗したときはマネージャーの責任です。

想像してみてください。結構、厳しいですよ。

でも僕は質問にこう答えます。「楽しいからです」と。

あきらかにつらくて大変なのに、僕はそれを楽しんでいる。マゾヒストではありませんよ。少なくとも、痛いのは嫌いです。で

も、やっぱりこのつらさは楽しくて、僕は今、幸せなんです。それはなぜか？

声優のマナージャーとしてのヒントにくわえて、そんな幸せに生きるための考え方も伝えられたらと思っています。

「声優をプロデュースする」

かれこれ一三年、僕はそんな仕事を続けています。

それは、つらくてかなしくてしんどくて……ほんの少し楽しいお仕事。

そこから得たいろいろな知恵を、
気持ち、本書に詰め込み
ました。

最後のページまでお付き合いいただければ幸いです。

声

優

を

プロジェクト

目次

まえがき 3

ある（元）声優の話 5

マネージャーの生き方 8

第1章

「声優」ってなんですか？ 23

1. 「声優」ってどんな人？ 24

職業としての「声優」 24

人間としての「声優」 27

いびつな才能 28

2. 「声優」って「仕事」ですか？ 「職業」ですか？

声にはメンタルが直結する 35

扱っているのは人間 37

イベント出演は声優の仕事か 41

3. 「職業」声優のやっかいなところ 48

声優の「上手い」に基準はない 49

声優を辞めるということ 52

4. 定食屋でうな丼を頼まれたらどうしますか？ 55

スタイルをどう決めるか 55

自分を客観視することの難しさ 58

5. 個性的な声優っていますか…… 61

オーダーに答えること 61

学ぶべきものは何なのか 63

第2章

「マネージャー」って楽しいの？

67

1. 「マネージャー」というお仕事 68

「付き人」と「営業マン」 69

付き人としてのマネージャー 69

芝居に専念できる状況を作る 71

「付き人」の仕事・上級編 73

人付き合いの方法 76

「営業マン」としてのマネージャー 78

「ゴリ押し」の何が悪いのか 81

2. 黒いリンゴは売りやすい 87

どうやって、声優に仕事を持つてくるか？

87

3. 声優にドラマをつくる 97

声優は多岐に渡る仕事ができるが……

97

加隈亜衣の「ドラマ」 101

4. 「マネージャー」はつらいよ 108

マネージャーの永遠の格言 108

マネージャーを育てるために 113

第3章

声優のマネージャーが考える「仕事論」

125

- マネージャーが育てることも必要 115
5. それでも、僕は「マネージャー」 120

1. 「好き」を仕事にしよう！ 127

「好き」を知るⅡ「自分」を知る 128

「好き」のレベル 130

「好き」であり続けること 132

「他人」と生きる 135

「好き」の見つけ方 138

2. 「運」に頼らない生き方をしよう 143

一〇〇回くじを引くための努力 143

レッテルを貼り替える 145

やれることは全部やろう 148

第4章

「運」は努力した者に 151

マネージャーと声優の相性とは 154

「バカなので何も考えない」は間違い 156

「夢」と「目標」と「現実」と 161

「夢」の大切さ 162

『COCOLORS』という挑戦 165

キャリアの曲がり角を迎える大量の声優 168

「夢」から「目標」へ 171

そして「現実」を生きる 177

幸せな生き方をしよう 178

あとがき

「声優」って

第1章

なんですか？

1. 「声優」ってどんな人？

本書は「声優をプロデュースするとはどういうことか？」というテーマの本です。

となると、まずそもそも「声優ってどんな人？」ということがわからないと話にならないですね。

この本の読者は、おそらく「声優に興味がある」もしくは「声優になりたい」という人が大半で、自分は声優について詳しいと思っている人も多いでしょう。でも、本当にそうでしょうか？ よくわかっていないこと、勘違いしていることも多いと思いますよ。

というわけで、まずは「声優」について、僕の知っていることを書いていきたいと思います。

職業としての「声優」

公共交通機関の車内や駅で毎日耳にするアナウンス。誰の声なのでしょう。言われてみると、気になりませんか？

デパート、スーパーなどのアナウンスはどうでしょうか。遊園地などで開催されるイベントのものはどうでしょう？

少し変わったところでは、就職活動を経験された人、もしくはなんらかの会社で研修を受けた人は、「企業VP（ビデオパッケージ）」と呼ばれる、各企業が「うちの会社はこういう活動をしています」と宣伝したい内容をまとめたVTRをご覧になったことがあると思います。映像に被さっている音声は、誰が入れているのでしょうか？

実はこのどれもが、声優の仕事なのです。

職業としての「声優」とは、「テレビアニメや外画（洋画）の声を吹き込む」……いわゆる「吹替」が基本のお仕事の人、という説明になります。最近だと映像作品だけではなく、ゲームのお仕事も増えているのは、きつとご存じですよ。

でもそれだけではないんです。街中で流れている大概の日本語音声は、声優がしゃべっているものだといっても過言ではないです。

厳密にいうと、それらの中にはアナウンサーが手がけているものもあるのですが、とも

あれ、声優の仕事が及ぶ範疇はんちゆうを考える上では、声を扱う仕事の大半は声優が手がける可能性があると考えて間違いではありません。

さらにいうと昨今は、その良し悪しはひとまずこの場では措おくとして、いわゆるアイドル的な仕事もあります。歌を歌ったり、ラジオでしゃべったりする仕事のことです。

もともと、声優は自分の名前を表に出す仕事ではありませんでした。「このナレーションは声優の〇〇さんが担当しています」というような情報は、本来、聴く人が気にするようなものではなかったんです。アニメのキャラクターであっても、あくまでそのキャラクターがしゃべっているものであって、裏で誰かが演じていることは見せるべきではないと考えられていました。今でもそう考えている業界人もいます。でも事実として、今は自分自身のパーソナリティを前に出すような形でトークをするラジオ番組から始まり、歌や人前のイベントといった業務にまで仕事の領域が広がっている。

「声優のお仕事」の内容は、大枠ではそういうものだと捉えてください。

では、そのような業務を日々行っている声優とは、どんな人たちなのでしょう。

次の項ではそんな疑問にお答えしましょう。

人間としての「声優」

とはいったものの、ひとくちに「声優」といっても、いろんな人がいます。その上で、「声優」という職業に就いている人の特徴をあえて一般化すると、一言でいえば「変わった人」ですね。この部分だけを切りとられると批判しているように受け止められるかもしれませんが、もちろんそんなつもりはありませんよ。

普通の人の感覚で言うところ「録音された自分の声を聞いてもらおう」というのは恥ずかしいことですよ。多分、読んでいる人の大半は同意してくださるのではないのでしょうか。たとえば小学校のころ、学芸会の様子を撮影したビデオを観て、自分の声を恥ずかしく感じた経験がある人は多いと思います。国語の授業で教科書をみんなの前で読まされた経験も、おそらく読者の九割以上の人にとって楽しい思い出ではないでしょう。

演じることを仕事にするとは、職業として日常的にそれに類する行為を平気でやっているということ。アニメや映画の吹替に限らず、舞台や映画、ドラマに出演することと同じです。それ以外にも、タレントやアイドル、芸人といったテレビに出るような職業の人はみな、そうでしょう。でもその中でも、特に「声」という一部分だけを世の中に出して大丈夫な感覚は、十何年も声優と付き合っている僕でも、実感としてよくわからないも

のです。声優に独特の感覚で、他の何かにはたとえ難いものだと思います。

趣味か何かとしてたまたま一回か二回やるだけならまだしも、声だけを人に聴かせることを生業なりわいにしようという人たち。それが声優です。だから文字通り、「変な人だ」という意味で「変わった人」。そしてもうひとつ、やはりどこか、すごい才能の持ち主だという意味での「変わった人」でもあるというのが、僕の考えです。

いびつな才能

声優の「すごい才能」とは、誤解を恐れずに言い換えれば「ニッチな感覚」というか、「いびつな才能」だとも言えます。声優は誰もが、どこか特殊な技能の持ち主なんです。

おおの ゆうこ
大野柚布子という声優がいます。僕の会社であるスタジオオマウスの系列会社、マウスプロモーションという声優事務所^①に所属している若手声優です（以前、僕はこのマウスプロモーションの社長としてマネジメント業務を担当し



東新宿にあるマウスプロモーション本社ビル。

ていました。以下、本書に名前の登場する声優は基本、マウスプロモーション所属です。そうではない方のみ、所属事務所名を初出時に明記します。二〇一七年に『天使の3P!』スリーピース『このはな綺譚』という二本の作品で主演させていただいて、少しずつ名前が知られるようになり始めています。

先日この子が、あるオーディションを受ける前、僕のところ「この役はどうやればいいか、アドバイスをください」と言ってきたんです。これ自体はよくある話なんです。それに対してアドバイスをしたら、「あ！わかりました！クリーム色ですね。もうちょっと赤っぽい感じだと思っていましたね」と言われたんです。僕からすると、何を言っているのかわからない。でも演技はアドバイスの前と後で変わっていて、ちゃんと台本から求められているイメージにハマるようになっていくんですよ。

彼女には色で声のイメージが見えるということなんですよ。

ほかに、作品のイメージを匂いで感じるという人にも会ったことがあります。僕らのようにそんな特殊な才能のない人間からすると、「おっとりとしている」「格好いい」といったような言葉を積み上げること、そのキャラクターのイメージを表現するしかないわけですが、そうではない形で、その人なりに役のイメージを掴むための何かがある声優に

は、ときどき出会いますね。

僕は「音響監督」と呼ばれる、アニメやボイスドラマの音響面を取り仕切る仕事もやります。音響監督の仕事には、音声の収録時に声優の演技に対して指示を出す業務も含まれているのですが、その仕事をするためには当然、収録前に台本を何時間もかけて読み込み、さらには映像をチェックしたり、原作を読んだり、ほかにもさまざまな準備を重ねて作品の内容を掴まなければなりません。

でも声優の中には、台本を渡されてから一回か二回くらい目を通すと、それでもうある程度のところまで、求められている演技に自分の演技を寄せられる人がいるんです。いろいろな作品に出演してきて、音声収録の作業に慣れているからこそできることなのかもしませんが、それにしても勘のよさに驚かされます。

そこまで極端な例ではなくても、文章を読み解く力、物語を捉える能力のすごさは声優には共通しています。ド新人からベテランまでそうですね。理屈じゃないところで文章を捉えられる感覚がある。だからときどき、とてもいい演技をしているのに、裏に



スタジオマウスとマウスプロモーションは同じビル内。

あるものを突き詰めて尋ねてみると案外わかっていないときがあるんです。理屈を積み重ねて答えに辿り着いているのではなく、役になりきっている。だから質問してみても、「だってこの子だから、こういう反応をするじゃないですか」みたいな、感覚的な答えしか返ってこない。どうして今、セリフをそういう風に読んだのか、理屈を付けられないタイプの人はかなりのベテランでもあります。

第一線で活躍している声優に共通する資質としては、音に対する感覚が鋭いことも挙げられます。もう少し具体的に言うところ「すべての音を自分のものにする感覚が鋭い」ともいいますか。だから声優には、モノマネが上手い人が多いんですね。モノマネといっても、別に専門の芸として披露するようなものではないです。学校で担任の先生のモノマネが妙に上手いクラスメイトがいたことはありませんか？ あれに近いですが、もっとクオリティの高いものを想像してください。自分がよく接する人のしゃべり方や、しゃべる内容といった特徴を掴んで、その通りに音を再現する能力が声優は総じて高いんです。

悔しいくらい、声優と僕たちでは音に対する感覚は違います。

その代わり……といっってはなんです、そういう人たちにはちょっと社会生活からズレ

ているところがあります。天才はどこかが抜けている、などとよくいますよね。声優も同じで、普通の人とは感覚がズレていることが多い印象があるんです。ズレかたは人それぞれですけれども。

たとえば、五十嵐裕美いがらしひろみという声優がいます（代表作『アイドルマスター シンデレラガールズ』双葉杏ふたば あんず役など）。彼女はマウスプロモーションの所属になって二年目ぐらいまでは、新幹線にひとりで乗れなかつたんです。もちろん、年齢的には立派な大人です。「みどりの窓口で新幹線のチケットが買えません」くらいならわからなくはないんですけど、チケットから何から全部こちらで用意して、あとは自動改札機を通って、チケットに書いてある番号の座席に座ればいいだけ……という状態にしてもダメでした。

これは珍しいパターンで、よく出会うのは数字が苦手なタイプですね。このタイプは、税金関係のことがひとりでできない人が多いです。声優は毎年、確定申告をしなければならぬんですが、そのために何を用意しなければならないかがわからない。そもそも確定申告が必要であることを知らない。こうしたことをきちんと指導し、必要であれば税理士を紹介するところまでやるのは、声優事務所の大事な業務のひとつです。

社会人としてすごくちゃんとした人も中にはいるんですけど、もっとすさまじい、本当

にお芝居以外のことは何もしない人もいます。たとえば大塚明夫おおつかあきお（代表作に『GHOST IN THE SHELL／攻殻機動隊』バトー、『METAL GEAR SOLID』ソリッド・スネーク役など）です（笑）。詳しくは著書『声優魂』を読んでみてください。ともあれそんな、放っておくと生きていけないような人が正直、声優には多いです。声の才能、お芝居をするという才能に關しては一〇〇点……もしかしたらさらに上、一五〇点、二〇〇点なのかもしれないですけど、普通の人が普通に持っているような能力を持っていない人が多いように感じます。そこをサポートする、埋めるために、声優のマネージャーという仕事は必要になるわけです。マネージャーが声優の足りないところを埋めると、一足す一が二以上になるんですね。



五十嵐裕美。

2. 「声優」って「仕事」ですか？ 「職業」ですか？

ここまでの文章でも使ってきた言葉ですが、「声優」というのはよくよく考えると変な言葉です。もっというてしまえば、嫌な言葉だとすら思います。

あらためて考えてみてください。「声優」という言葉が指しているのは、仕事ですか？ 職業ですか？

僕はそのどちらでもあると思います。ずるい答えですね、すみません。

仕事としての「声優」とは、前の項でも書いたように、あるアニメのキャラクターや映画などに出演している生身の役者に声を吹き込む作業のことです。これはわかりやすい。たとえば、普段はドラマや映画に出演しているような役者が、ある作品に声の演技で参加したら、それは仕事としての「声優」をやったことになるわけです。

しかし、職業としての「声優」はどうでしょう。「どんなご職業なんですか？」と尋ねら

れたときに、「私の職業は声優です」と答える人とは、どんな人なんでしょうか。イメージが湧きますか？

言葉の定義をとにかく言う気はあまりないのですが、それでも、いろいろな人に向かって「声優」について話す機会も多い僕は、ここがどうしてもひっかかるんです。特に声優になることを目指している人と話すときには、とても気になる。声をあてる仕事をやってみたいという意味なのか、「声優」という職業に就きたいのか、考えが整理されていない人が多いんです。

というわけで、ここからは職業としての「声優」について、あらためて僕なりの考えを述べ、整理していきます。職業として考えたとき、声優がやらなければいけないことは何か。そして、マネージャーは職業としての声優に対して、どのように向き合い、どのような形で仕事をしていかなければならないのか。

声にはメンタルが直結する

まず、仕事を職業にするとはどういうことか。それは、やりたくない作業もやらなければならぬということです。

僕もデスクワークや経理の作業は嫌いで、ぶっちゃけ、やりたくないです。でも職業に付随するものだから、やります。これは社会人なら、職業に就いている人なら誰もが持っている感覚……というか常識です。でも声優には、こうした感覚が薄い人が多い。「こんなことはやりたくない」みたいな気持ちだが、いきなり前面に出てくることがあります。

つまり、声優志望者に限らず、プロの声優として活動している人でも、「声優」という職業に対する意識がはつきりとしていない人がいるということです。

もちろん、プロの声優であっても、「声をあてる仕事が好き」という気持ちが仕事の根幹にはあります。その上でプロになったからには、声優という職業に就いたという意識も持つようになるべきなんです。でも、そうした意識が持ていない人は割といます。

これだけのことなら、どんな仕事に就いた人にもあることかもしれません。しかし、声優の場合は大きな問題があります。「やりたくない」という気持ちが声に直接影響してしまうんです。だからメンタルの調子が下がると、やりたかつたはずの仕事のクオリティも落ちてくる。

声優のマネジメントの難しいところはここです。

つまらない仕事でも、やらないとしようがない局面はどうしてもある。誤解がないよう

に言えば、つまらないかもしれないけれど、まっとうな仕事です。こちらが一方的に利益を被るこうむような、法に背いてそむいるような、理不尽な要求ではありません。常識的に断る理由なんかない依頼を想定してください。そういうとき、社会人なら本来は断ってはいけないですよ。でも声優の場合は、断る理由がないものであっても、マネージャーが断らなければいけないときがある。無理に請けて、今、この人の仕事に対するモチベーションを落とすことは、今後を考えた場合によいことではない。そんなタイミングがあるんです。

しかし逆のケースもあります。スケジュールやギャランティーといった条件面が厳しいとか、それ以外の点で声優のモチベーションを一時的に落とすようなものであっても、その人のキャリア形成を考えたときになんとしてもやらせなければいけないタイミングもあります。

マネージャーの仕事は、バランスを取りながらの判断の繰り返しです。

扱っているのは人間

声優という職業に就いているにもかかわらず、そのことを十分にとらえられていない、可能であればやりたい仕事だけをしくて、気の向かない仕事では本領が発揮できない人

もいます。判断と調整を繰り返し、そうしたひとりでは社会と噛み合わないような人を、上手く社会と噛ませる。それが声優をマネジメントすることです。

ですから、正直なところ、声優のマネージャーという仕事をしていると、理不尽なことはたくさんあります。でもしょうがないですよ。扱っているのが人間ですから。

この「扱っているのが人間」というのは、僕の会社の同僚や、同業他社の人がしょっちゅう使う言葉です。

どういうことか。たとえば缶詰を売るのであれば、別に今日売ろうが明日売ろうが、もつと極論をいえば、一年後に売ろうが一緒です。消費期限さえ破らなければ問題ない。逆に生鮮食品だとかお酒だとか、時間が経つことで悪くなったり良くなったりするものであれば、その価値が最も高くなるタイミングを見計らって売ればいい。

でも人は、今日と明日でも違う。一年後なんてまるっきり違う。そして、時間が経つことで良くなるか悪くなるかは誰にもわからない。予測も立てられない。声優は誰でも感受性が強いので、僕らからするとどうということのないような出来事でも急にテンションが上がったり下がったりする人が多いんです。そうした予測の立たない人を扱う難しさは、マネージャーという仕事に付きものです。

こういう話をする、「人間だもの、体調を崩したり、声が出なかったり、いろいろありますよね」と言われるんですけど、違います！　そういう話ではありません。何かちょっとした病気になるくらいのことだったら、普通の仕事と同じです。

声優は、アウトプットがごく些細な感情の違いに左右されるんです。さきほどモチベーションのことに触れましたが、それだけではありません。さまざまな気持ちの揺れによって声が変化します。これほど繊細な職業はないと僕は思います。

工場で仕事をしている人の一日の作業の成果が、テンションに引っぱられることはないでしょう。他の仕事でも、微細な違いはあるかもしれませんが、メンタルや体調で仕事の成果に、そこまで直接の影響は出ない。プロであれば誤差の範囲に収められるのではないのでしょうか。

でも声というアウトプットは、プロであつてもそうはいかないんです。

同じクリエイティブな職業でも、たとえば文章を書く仕事であれば、思考を文字に一度変換することで客観視ができる。そうすることで多少はクオリティの担保ができるのかもしれない。しかし声は、内側からそのまま出てしまう。フィルターが掛けられない。

映像作品ならまだマシです。ビジュアルの要素で、声の微細な変化はカバーしてもらえ

るところがあります。でもドラマCDやラジオ番組のような声だけでお客さんに評価される仕事だと、声のささいな違いもとても目立ちます。ある程度は役になりきり、演じることでなんとか誤魔化しますけど、そうした仕事のときにテンションが下がっていたら、裏ではマナージャーは大変なことになっています。「大丈夫！ やれるから！」とずっと励まして、気持ちを盛り上げ続けることも珍しくないです。

最近だと多いのはイベント関係ですね。ライブで、前日のリハーサルまで元気に、楽しんでお客さんを前にしたら「私、ダメだと思っています……」なんて言い出して、楽屋で泣き出す。泣くぐらいならまだかわいいものです。本当に体の具合が悪くなる人もいます。

高田憂希^{たかだ ゆうき}という声優がいます（代表作に『Tokyo 7th シスターズ』^{てんどうじ}天堂寺ムスビ役、『NEW

GAME!』^{すずかぜあおば}涼風青葉役など）。おかげさまで最近、仕事の場合が順調に増えてきている子です。そうしてできたファンのみなさんのあいだでのパブリック・イメージは「明るく元気^もで物怖じしない」みたいな感じだと思っています。でもどちらかというと本質的には気の小さい、割とイベントなどで人前に出る際には緊張するタイプなんです。高田が新人だったころは、ステージに立つ寸前まで、ずっと緊張を解こうと努力していました。本当にステージに上

がる寸前までそうしないと、震えが止まらないんです。ステージを降りてからも「大丈夫だから」と何度も繰り返し言い聞かせないと落ち着かない。今ではステージ慣れして、イベントも立派にやっていますが、最初のうちはそれくらい配慮が必要だった子もいます。

イベント出演は声優の仕事か

ところで、今の例を読んで「イベント出演なんて声優の仕事じゃない！」と思った人もいるでしょうね。

いい機会なので、その点についての僕の考えをここで書いておこうと思います。

もともとはマウスプロモーションもそういう会社でした。一三年前までは。

一三年前……つまり、僕が入社する前のマウスプロモーションは、外画の吹替がメインの声優事務所だったんです。アニメの仕事をしている声優は限られていて、業界的にも、「外画がメイン、でもアニメもときどきやる声優事務所」といった目で見られていました。入社直後、このままだと会社の経営がキツイと僕は判断しました。外画が全体的にビジネスとして少し落ち込んでいましたし、生臭い話になりますが、そもそもの話として、

アニメの仕事のほうが金銭面での実入りがよかった。くわえてそのころから、アニメの仕事がやりたいという若い声優が所属することが増えていたんです。しかし、やりたいからといって、いきなり「はい、そうですか」と仕事が湧いて出るわけじゃない。ただでさえ、アニメをやるイメージが薄い事務所なわけですから……。

そんな事情もあって、アニメの仕事を取るために僕が最初にとった手段が、イベントの仕事を増やすことでした。

当時、ニコニコ生放送の番組を始め、声優が声だけではなく、顔を出してやるようなゲームやアニメ関連の仕事がちよろちよろ出始めたころだったんです。その前だと、それこそ林^{はやしばら}原めぐみさん（アーツビジョン所属を経て、現在はフリー。代表作に『新世紀エヴァンゲリオン』綾波^{あやなみ}レイ役、『ポケットモンスター』ムサシ役など）や椎^{しいな}名へきるさん（アーツビジョン所属。代表作に『魔法騎士レイアース』獅堂光役、『ガールズ&パンツァー』蝶野亜美役など）のような、ごく一部の人気声優がステージに立つことはあったとしても、まだそれほどファンが付いていないような声優が配信番組をやるとか、どこかの会場でトークやライブのイベントをすることがそこまで多くはなかった。

機会がなかったというだけではなく、声優の側にも、そうした仕事を積極的にやる人は

少なかったんですね。「自分たちは声の仕事をする職業なんだ」という意識が、当時の声優には全体的に強かったんです。でも僕がBlu-rayやDVD、CDといったパッケージを販売するメーカーの担当者さんと話をしていると、販促番組やイベントをやりたい人が多かったんです。少しでも宣伝になるような仕掛けを打たないと、作品の売れ行きがどんどん苦しくなっていた時代でしたからね。

それなら、うちの声優は顔出しの仕事でもなんでもやりますよ……という話をしたんです。そこから「マウスプロモーションだったら宣伝に協力してくれる」という、業界的な評価が生まれました。

これも誤解されたくないことですが、うちの事務所に所属している声優たちは演技の実力はあるんです。でも声優の世界は厳しいですから、同じくらいの実力がある声優は山ほどいます。オーディションで同率一位で競っている、甲乙つけ難い声優の中から、誰を選ぶのか。ある作品のキャストを決めるにあたって、言葉を選ばずにいえば、もはや声や演技の質で比べるのであれば誰を選んでも違いはほとんどないという局面は、実は珍しくないます。イベントなどで宣伝に協力できるかどうかは、その局面を迎えたときの後押しです。あくまで。

声優が何よりも演技をしたい人たちであることは、マネジメントする事務所もわかっています。そのためであれば、遠回りであってもニコ生に出演したり、パッケージの映像特典のためにロケに行ったり、演じることとは関係のない仕事もする。マウスプロモーションが声以外の仕事にも積極的だったのは、あくまでそういう話だったんです。

だから僕の中では、アニメの仕事をあまり取ってこられない事務所が、アニメ業界に食い込んでいくために必要な手段として、ニコ生やイベントに出演するというのは理屈として何もおかしいものではなかった。

でもやっぱり、そうした理屈に納得しない人はいました。頭ではわかって、やはり演じることのみを仕事とするのが声優の正しい姿であるという人はいて、その考え方は今でも間違いではありません。さらに問題を難しくしたのは、これがあくまで事務所全体のイメージ戦略だった点です。どういうことかという、ニコ生に出演してがんばったのはAさん、でもそれによってマウスプロモーションの評価が上がった結果として、アニメで役を手に入れたのはBさんというケースがしばしばあったんです。Aさんのイベント仕事での評価が、声の仕事に直結しなかった。そうすると、Aさんも大人ですから怒りはし

ないですけど、仕事のテンションは下がるわけです。人間ですからね。

そうやってアニメ仕事を開拓していた当時、僕がいちばん喧嘩した声優は五十嵐裕美（32ページ）です。

今では立派な声優ですが、当時まだ彼女は出始めの、養成所に所属したかどうかくらいの時期でした。だから僕が事務所としての戦略を練っていたときに、彼女に目をつけたんです。

ルックスが良かったし、若かったし、おしゃべりはそこまで上手くなかったけど、アニメがもとめ好きで、アニメの仕事がやりたいと言っていましたから。「俺と悪魔の契約を結ぶか？ 黙って俺の持ってきた仕事をやるか？」と言って、今にして思えばほぼ騙したようなものでした。別に趣味でもなんでもないし、それまで経験したこともないのに、仕事でスカイダイビングまでやっていますからね、彼女は。「どうしてこんなことしなきゃいけないんですか!？」と、散々喧嘩しました。

『パパのいうことを聞きなさい!』で小鳥遊^{たかなし}ひな役に決まるまでは、毎日……とまでは言いませんが、それに近い勢いで言い争ったと思います。よく辞めなかったですよ。

機会があるごとにいろいろなところで話していることですが、僕が入社して以降にマウスプロモーションに入った声優にMVPをあげるなら、絶対に五十嵐です。五十嵐がいなかったら、マウスプロモーションは今のようないアニメと外画の仕事がほぼ五分五分で、アニメの中でも大きな役を任せてもらえるような事務所になっていませんでした。その下地を作ったのは、確実に五十嵐の力だと僕は思っています。

加隈亜衣かくま あい（代表作に『selector infected WIXOSS』小湊るう子役、『妹さえいればいい。』白川京役など）以降の、五十嵐より下の代にあたる所属声優たちは、五十嵐がきちんと仕事の筋道を見せているから仕事への取り組み方が違うんですよ。

僕からいろいろな仕事を振られたとしても、最後には自分のやりたいこと、演じることが帰ってくるができる。そんな職業としての声優の在り方を、五十嵐という成功例から学んでいる。

その点、僕の言うことを聞いてもどうなるかわからないような状況で、五十嵐はよくやってくれたと思います

声優のマネージャーという仕事の辛いところは、どんなに完璧な売り出し方のプランを考えようが、どんなに営業スキルが優秀だろうが、そのやり方にマッチした声優というカ

ードを持ってないと戦いようがないんです。逆にいえば、たまたま強力なカードを持ったマネージャーは何もしないでも戦える。

あのとき、五十嵐裕美というカードを引けていなかったら、僕は戦えませんでした。

3. 「職業」声優のやっかいなところ

サラリーマンはよほど無能でなければ、年を食えば大体偉くなります。声優はどうでしょうか。

答えは……偉くなれません。

サラリーマンは偉くなれば人を使えたり、自分で自分の仕事のある程度コントロール出来るようになります。声優にはそれが無い。どんな大御所になろうが、結局、誰かが仕事を作ってくれなければ仕事ができない商売なんです。つまり、一生誰かに頭を下げ続けなといけない。

嫌な言い方をすれば、声優はどんな大御所だろうが人気者だろうが、業界全体がその気になったら消すことだって出来るんです。全員が使わなければいいだけです。そうしたら、ものの三か月でその声優は、業界からいなくなると思えます。そんなに極端な例はこれまで見たことがないですし、別に「だから言うことを聞け」と脅かしたいわけでも、

事務所の権威のようなものを示したいわけでもありません。誤解のないようにお願いします。ですが、どんな声優もマネージャーも、いつ仕事が途絶えてもおかしくないという恐怖感を一生抱え続ける必要があります。

この項ではそんな、職業として声優を考えたときの「やっかいさ」について書いていきます。

声優の「上手い」に基準はない

自分で絵が描けるわけでも、物語が書けるわけでもない。声優は、誰かが物語を書いてくれて、絵を描いてくれて、それを演じてくださいと言ってもらわないとできない仕事です。そこからは本質的に脱却できません。

この話をさらに難しくするのが、声優の承認欲求の問題です。

人間は誰しも他人に認められたい気持ちがあると思いますが、声優のように自分を前に出すことを仕事として選んだ人は、その気持ちに特に強いです。誤解を恐れずにいえば、目立ちたがり屋なところがあります。むしろ、そうした部分がなければ声優は続けられないでしょう。

でも声優の仕事には点数がつかないんです。この声優は八〇点、この声優は七〇点……みたいな評価をプロから聞いたことはないでしょう？ 当たり前で、そんなのつけようがないんです。

「声優の能力を測る指標はありますか？」という質問を試しにしてみると、世間の多くの人が「演技力」と答えます。でも、僕は十何年この業界にいますけど、「演技力」というのは声優に関する言葉の中で最も意味のわからないものです。

たとえば、あくまで「僕は」ですが、自分が関わらせていただいた声優の中で、沢城みゆき（代表作に『ルパン三世』峰不二子役、『ゲゲゲの鬼太郎（第六作）』鬼太郎役など。二〇一五年にマウスプロモーションから青二プロダクションに移籍）の演技力はトップクラス、本当に上手い人だと思っています。これに対して疑義を呈されても、それは議論のしようがない。僕の基準ではそうなんですから。

でも逆に、そうではないと考える人がいても、僕は反論できません。驚く人も多いでしょうが、実際に仕事の場面でこうしたやりとりは何度もありました。では、疑問を持った人はおかしいのか？ 違うと思います。単純にその人が求めている「上手い」の感覚が、

僕の基準とは違ったんです。演技力というのは、その程度の指標でしかないんです。

だから多くの人が簡単に「あの声優は演技力がある」と言うけれど、それは突き詰めると、たまたま与えられた仕事にOK／NGを出す権利を持った人の感覚とその声優の感覚が近かったというだけのことです。もしくは声優側が、相手の判断基準を読み解いて、自分の演技を合わせる技術が高かったのかもしれませんが。

いずれにせよ、ただそれだけの話であって、なんらかの絶対指標としての演技力などというものはないです。一〇〇m走の選手は一〇秒で走る人と一一秒で走る人がいたら絶対に一〇秒で走れる人のほうが優秀なわけですが、声優にそんな指標はないということです。完全に、評価する人による。

だから声優の立場からすると「どうして私が選ばれたの？」と不思議に感じるときもあるし、逆に「なんで私じゃなくてあいつが選ばれるの？」という気持ちも多々生まれてしまう。そこがまた、難しいところです。

想像してみてください。アテにならない謎の指標で永遠に「上手い」「下手」と評価され、仕事が左右されてしまう。

怖くないですか？

声優を辞めるといふこと

もう一步踏み込むと、この指標のあいまいさのやっかいなところは、辞められない人を作ってしまうことです。

また一〇〇m走の例で考えると、どんなにがんばっても一〇〇mを一秒でしか走れない人に、「世の中にはもつと速く走る選手が数多くいる。君には一〇〇m走の才能がないから、ここでやめたほうがいい」と宣告した場合、たぶん、言われたほうもどこかのタイミングで納得すると思うんです。もちろん悔しいでしょうけど、これだけがんばってダメだったんだから……と思う一線がたしかにある。

でも演技の場合は、わけのわからない感覚なだけに、なかなか納得できないんです。

演技力に客観的な指標はありませんが、それでもある一定の人数に、大体の人にウケる感覚は漠然と存在する。そうでなければ、次々と役に決まる声優がいることを説明できませんからね。そして、そういう感覚を持っていないならば、どこかで声優を辞めたほうが正解なんです。

僕はいろいろな声優を見てきているので、辞めるようにアドバイスをするタイミングは

外していない自信があります。でも言われた本人にしてみれば、「納谷さんはそういうけど、でも私は音響監督の〇〇さんの手がけた作品に何度か出演していて、そこではいつも上手いと言われている」だとか、「自分の感覚では、いま売れている〇〇という声優と自分の演技にそこまでの差があるとは思えない。なぜ俺が下手だと言われて辞めなければならぬのか」だとか、言い分はあるわけです。ここまで露骨な言い方をする人は滅多にいないけれど、そこまで強く返された場合、こちらも反論はできません。

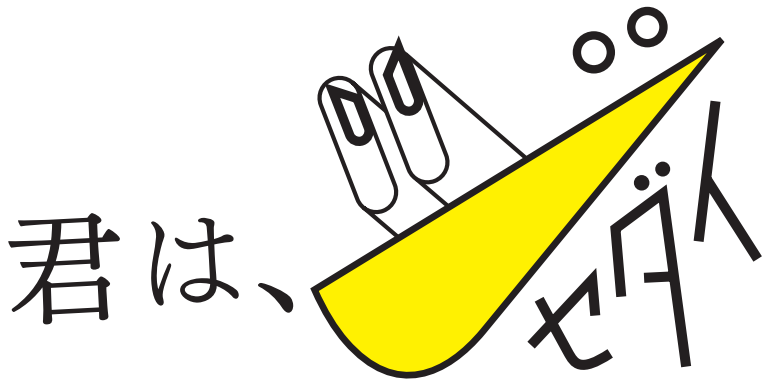
しかしそれで声優を続けたとして、何が変わるわけでもない。仕事が少ない状況はそのまま、先にはただ苦しい人生が待っているだけなんです。逆転できる人は、極めて稀まれにしかいません。

マネージャーの仕事の理想は、手がけた声優全員をスターにできること。それができたらいい。でも現実はどうはいかないわけで、僕はどこかで辞めさせてあげる、夢を諦めさせてあげるのもマネージャーの仕事だと思っています。

とはいえ、なかなかこれは上手いかないんです。納得しなかった人の辿る道は大体こん

な感じで、まず、所属している事務所と合わないという話を始めます。そこからフリー（無所属）の声優になるか、もしくはどこか別の事務所に移籍する。でも、それで上手くいくケースは少ないですね。当たり前です。少なくとも僕が辞めるように話をするときは、所属している事務所に合う／合わないといったレベルの話をしていないんですから。

声優のマネージャーをやるということは、ひとりの人間の人生を狂わせてしまう可能性がある。声優のマネージャーについては第2章で本格的に論じますが、ひとまずこの場合でも、このことを強く胸に刻んでおいてください。



君は、

何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!